璉珹寺通信

第７１号

２０２２年１０月１日
璉珹寺通信編集委員会
〒６３０－８３０７　奈良市西紀寺町４５番地
TEL　０７４２-２２-４８８７

みんな健やかに、安全に・・・７月２３日　地蔵尊祭りの数珠繰り

観音さまに感謝！

仏像としての真価―再発見

下間景甫

今年の夏も暑かった。とても暑かった！

水分補給、熱中症に気をつけて、おまけにコロナ禍がまだ鎮まらないこの夏。閉口しました。

でも嬉しいことに前年よりは行事ができるようになりました。

７月２３日恒例の地蔵祭りでした。ポスターを貼ったり、チラシを作ったりして、ご近所にお知らせしました。ちょうど夏休みに入ったばかりで、たくさんお子どもたち、お母さんやお父さんも参加してくれました。

暑い中でしたが、お地蔵様の前でお参りし、すぐに庫裏に上ってみんな輪になって数珠繰りをしました。健康と安全をお見守りしていただいたお礼と今年のお守りをお願いしました。

今年の出し物は元小学校校長先生の「お寺で理科する」のお話で、手品のような実験を見せてくれました。子どもたちが目を輝かせているのをみて先生に感謝し、企画がうまくいったと安堵しました。

その後は子どもたちお待ちかねのスイカの食べ放題！　今年も町内からお供えとして大きなスイカをいただきました。よく熟れたスイカを二日前から冷やしたのでとても「おいしい！　甘い！」と大喜びでした。「もう入らへん」といいながら頬張っている子供たちの姿は本当にかわいらしい。お母さんもお父さんもたくさん食べてくれました。みんなの嬉しそうなお顔、満足顔が何よりのプレゼントです。来年もまた元気でお参りしてくれることを念じながら、袋いっぱいのお土産を渡して「さ

よなら」しました。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

　お盆はお寺にとって、とても大切な行事であり、忙しい日々でした。檀家さんまわり、お墓の回向と休む暇もなく走りまわりました。そんなわけで7月・8月の「京終さろん」は寺での開催をお休みさせていただきました。それでも熱心な皆さんは安西さんのゲストハウスを会場にして開催されました。

・・・・・・・

　9月に入ると、これまた檀家様の法要が目白押しになり、本当に忙しくさせていただきました。よくぞ身体がもったなぁと感じましたが、まだまだ修行が足りないと反省ばかりです。

　また、孫が9月17日の学園祭で学友たちとダンス出演することになり、ちょうどお寺に大きな鏡の部屋があるので、練習場所に最適だと、夏休み中みんな誘って練習に来ました。若い方たちのダンスはみているだけでも元気がもらえて、楽しませてもらいました。学園祭当日は台風が近づいて天候が危ぶまれましたが、幸いにして青空のもと、校庭で繰り広げる元気なダンスを見せてもらいました。思わず「ブラボー1」と大きな拍手をおくりました。

　10月が近づくと、「今年は大人のお月見会やりますか」との問い合わせの電話ベルがよく鳴りました。が、飲酒を伴う会食はまだ油断すべきではないと思いお断りしました。みなさん「大人の月見会」を楽しみに覚えて下さっているのです。来年こそは心配せず開催できますようにお仏様に手を合わせました。

　歌う会「マツリカ」も動き始めました。コロナワクチンの成果で収束に向かっているのでしょうか。患者数も少なくなっているようです。早くマスクなし、心配なしの生活ができるようになって欲しいものです。

・・・・・・・・・・・・・・

　つい先日、東京芸術大学の仏像専門の松田誠一郎先生が来られて観音菩薩像のお話を聞く機会がありました。

　璉城寺の観音像は京都向日市の宝菩提院願徳寺の如意輪観音像と同じように桓武天皇の誓願を伝える立派な仏像だとのことです。これと共通する秋篠寺の十一面観音像や道明寺の観音像も話題になりました。

　桓武天皇は紀橡媛と志貴皇子の間に生まれた白壁王（光仁天皇）の血筋をひく孫に当たります。だから璉城寺とご縁のある天皇です。母親が高野新笠という渡来系の子孫であり、秋篠寺や道明寺は、大和と河内という違いがあっても、いずれも土師氏の里に建っています。

　これらの仏像が共通するのは、髷（まげ）や顔の表情などに特徴があることだそうです。

　璉城寺の観音像はダルビッシュに似ているといわれますが、質問にた

いして先生は作者が渡来人だったかもしれないけれども名前は分からないとのことでした。

　璉城寺と宝菩提院の観音像は、材料がカヤの木という点でも共通しています。実は、私の母の実家は吉野の山奥ですが、家のそばに大きなカヤの木があって、子どもの頃この木に登って実をとったことを懐かしく想い出しました。私にこんな巡めぐりあわせがあったのです。

　あらためて平安初期に造られた立派な仏様をお守りさせていただいていることに感激して、ただただ感謝の念でいっぱいになりました。大切にお守りしなくてはと改めて気持ちを引き締めました。

合掌

俳句　（9月例会）

風尾花四方に礼を言う

秋の蝶一言交わして別れゆく

虫の音やむや回廊のきしむ音

蝶追えば回廊のはてうろこ雲

直立の背比べする尾花かな

いいかおりどこどこどこきんもくせい

秋の暑し庭に降りたる鬼瓦

ひがん花お地蔵さまそばが好き

京終さろん

7月21日、第105回さろんは暑さ対策で冷房の利く「町屋ゲストハウスならまち」が会場になりました。さろん主催者・安西さんのお宅です。テーマは**「優しい防災 明日の災害　にどう備えるか！」**。講師は京都大学防災研究所の**畑山満則**さん。

同大学では100人ほどの研究者が災害関連の研究を行っているとのことです。

畑山さんの話は「日本に住むということは災害と正面から向き合うこと」と、防災と減災をテーマにしたものでしたが、実際に起こる地震や豪雨のメカニズムを知ることも大切だと最新の科学的知見についてのお話が重用な内容でした。しかし残念ながらすべては紹介できません。感想にします。

むかしは気象変動による災害は、暴風、竜巻、豪雨、洪水だったが、最近では地球温暖化による線状帯降雨による崖崩れや土石流被害が頻繁に起こっています。地震は100年から1000年に必ず起きる現象であって、日本ではその観測器を網の目のように設置し予測できるようになった。水害については2001年「水防法」によってハザードマップの公開が義務付けられた。しかしこれは河川の氾濫だけでその他の水の被害は表示していない。「なるほど」と日常を思い返せば納得できます。

ところでどうでしょうか。地震にしても水害にしても行政からの「避難指示」がなければ「「避難しなくてもよい」と自己判断する傾向があるがこれは危険なこと…。地震に関しても「断層帯」マップによって自宅の安否を判断する傾向があるが、土のなかは宇宙より解明できないことが多いというのが研究者の常識。こんな事情によるのか「断層帯」の公表が最近中止されたとのこと。これにかんして講演の後の質問コーナーで「最近、原子力発電が再開されるニュースがあるがどうお考えですか」と質問があり、「公表の中止と政治的関連がないとは言えない…」と見解を述べられたのが印象的でした。

・・・・・・・・・・・・・・

8月の「さろん」は、Code for Nara代表・**石塚康司**さんの**「シビックITと見える化」**のお話でした。

「シビテック」と　いうのは、英語の「市民」と「技術」を掛け合わせたもので「市民生活に役立つ技術」を意味するそうです。

石塚さんらの団体は，ITで地域の活性化を図りたいと、

① 当事者が自ら考え自ら動く。

② テクノロジーは道具。

③ 活動はバザール方式―各自持ちよりの市場方式で、参加者は余暇を使ってのボランティアによる活動

というポイントを挙げ、具体れを紹介されましたが、ここで詳しくはとても紹介しかねます。

9月のさろんは彼岸が過ぎた29日、会場が璉城寺へ戻ってきました。話し手は毎年9月にお勤めくださる東大寺の**上司永照**さんです。お水取り行事の声明なども聴けるかと参加者も期待が膨らんでいたようです。

ところが今回のテーマは**「醍醐寺の 竪（りゅうぎえ）義会 に東大寺僧が参加」**したときのお話。世間ではあまり知られていないものです。

上司さんも「面白くない話」と断りながらも、東大寺発行の「けごん」第108号掲載の東大寺学術顧問・日本女子大学名誉教授・永村真氏の記事をつかってお話されました。

以下その要約です。東大寺本坊に貞観17年（875）聖宝（理源大師）が東南院を創建し、さらにその翌年に京都醍醐寺を開創しました。

東大寺に入寺した聖宝は三論宗と真言宗を学び、醍醐寺でも両宗を学び発展させて、僧侶の資格試験とでもいう「竪義会」を両寺の僧によって行うことになったそうです。

しかし室町中期の戦乱で中絶し、江戸時代末までは醍醐寺のみで細々と継承されていたが、最近、上司さんの持宝院で昔の史料が発見され、そこには東大寺と醍醐寺共同の竪義会を行った内容が記録されていたとのことで、昨年末、この記録によって再現したとのことです。醍醐寺にとっては明治以降にまったく寺内から消えた三論宗の法会の復活であり、東大寺にとっても宗の存在を再確認するという、両寺の仏法興隆の得難い催しになったことで、今年七月にも実施されたのでした。

上司さんは東大寺から四人が参加した中の一人。その時の問答を再現、朗々とした声が響きました。実際はこの場面を数人の僧が大小、強弱の声で唱えられたのですから、きっと音楽的雰囲気だったでしょう。竪義会はのちに芸能化され、狂言になったとのこと。「なるほど」とうなずく秋の夜長でした。

明治維新より寺内で消えた三論

左・東大寺二月堂より大仏殿と生駒方面を望む。
下・三月堂の

超古代の紀氏

橋本健一（名古屋市）

『紀氏家牒』は超古代紀氏のいかにも確かな系譜のようですが捏造されています。

西暦十二世紀中期頃成立の『三国史記』巻三十五地理二に「白城郡は、もと高句麗奈兮忽景徳王が安城郡に改名」とある。

日本書紀に登場しない白城宿祢は謎の人物でもあるが、大阪府泉南郡岬町淡輪の住人達が云うのには、

「紀氏家牒新紀角宿祢の児が白城宿祢と載るが、あれは違うし伝承がない。西陵古墳の東の数百メートルの所に、かつて土の盛り上がった所があったが、掘っても何も出なかった。白城宿祢の墓だと云われていたが、妻がこちら方面の生まれだったとしたら築かれたのだろう。三国史記に高句麗白城郡の事が載るが白城で生まれた渡来人だろう。だから小弓宿祢の墓を淡輪に築いたのだ。白城宿祢がなぜ紀氏を名乗ったのか。白城と小弓が住んでいた所や小弓の意味や小弓の子孫などの伝承はない」など、次々と湧き上がる謎を聞かされ、大いに納得しました。

「事実は小説より奇なり」と云われます。これから言えるのは、紀氏系図は武内宿祢と紀角宿祢とは繋がり、白城宿祢は渡来人であるから途切れているが、次の小弓宿祢とは繋がっている。この後は約二百年間が空白であると云われるのは現在の系譜が空白部分を出処不明の資料から抜き取り、時代順に穴埋めした代物であると巷で聞くからです。

寄ってわが家の先祖・長谷雄は天智天皇十年登場御史大夫紀大人から始まるのですが、巷ではどこかの時代に紀角宿祢か小弓宿祢の系統と合わさっているかも知れないとも耳にしています。推古天皇二十八年録の「臣」部の紀氏は如何に捏造されていたのか。

回文詩

橋本健一（名古屋市）

きしがよいありつねきいといこうこうごいさいきねつりありよかしき
紀氏が佳い有常　紀伊　再興　向後異彩　希ね釣り合い佳かしき

うたうきつらゆきしいめいかたかしはでしぐささくしではしかたかいめ
詠う　紀貫之　氏偉名　家　高し派手仕種　作詞　では仕方　解明

いしきゆらつきうたう
しき揺らつき詠う

けかもおいまあやしくやきでらさんまらぶつまかはなやかやなはかま
かもお今　妖しく　や紀寺　さん真裸仏　摩訶華　やかやな袴

つぶらまんざらてきやくしゃあまいおもかげ
つぶら満更　敵役者　甘い　面影

じうよしんれいのじようこうけなはなさかすさんごうそうごんさすが
慈雨よ神霊　の常光　希な華　咲かす山号　荘厳　流石

さなはなけうこうよしのいれんじょうじ
さ名はな稀有香　佳しの威　璉城寺

そうよむりもとおせばどうりがとくとひっこむなればなんとやらが
そうよ無理も通せせば道理　が疾くと引っ込むなれば何　とやらが

どんなはれなむこっぴどくとかりうどはせをどもりむようぞ
どんな腫れなむ小っ非道くと狩人　長谷雄吃もり無用　ぞ

璉城寺の謎とロマン

紀貫之の墓（藤にからまれた木は枯れぬる）

野尻幸男

璉城寺の境内に安置された貫之の墓は「いつ」「誰が」造ったか、刻字は摩耗が激しく読み取ることはできません。かろうじて読める「貫之墓」だけが頼りです。

比叡山裳立山（もたてやま）の『紀貫之の墓』を訪ねたのは数年前の秋でした。

比叡山ケーブル裳立山駅から徒歩５００メートル。紅葉する樹々のあいだから琵琶湖の湖面が光って見える場所に紀貫之の墓がありました。

裳立山は『大日本史料』【滋賀県坂本村志】に「その形が裳裾に似ている。湖上を望み、風景佳麗なり。貫之これを愛し、遺嘱して死後、爪髪を埋め、墳墓を築かしむ」と記載され、明治十六年十一月五日、段別４歩を墓地として官有地に登録するとも記されています。

比叡山の墓を訪ねたときは気づかなかったのですが、琵琶湖の対岸に近江富士（三上山）が見え、その向こう（日野町）に馬見岡綿向神社とその神体山とされる綿向山（１１１０㍍）が真東に見えたはずでした。

司馬遼太郎は『街道をゆく』「近江散歩」でここを訪れ、綿向山の姿に目をとめて神主から綿向神社のご神体だと教えられ、この神の使いが「イノシシを歳神」にしていることも知ります。私はそのイノシシ歳です。

貫之が志した神社の棟札

綿向神社について『大日本史料』の次の記事が注目されます。紀貫之が「大嶽社」と呼ばれていた時の社殿再建に際して祈願した「梁簡（むなふたのめい）銘」があります（「閑田耕筆」）。意訳すると次のようなものです。

「大嶽社（おおたけしゃ）は天穂日命神の古跡である。欽明天皇六年、錦嶽に創始し、その後、天武天皇が朱雀元年に修復・立柱。しかれども歳月の星霜を経て朽ちたためいま修復し立柱を行う。願わくば、末永く官民協和し、疾病を除き、穀物豊穣をこい願うものである

天慶八年乙巳八月二日　**従四位下行木工頭紀朝臣貫之謹誌**

神主　正六以上　出雲宿祢貞主

工匠　無位　鞍部稲足　」

とあり、続けて銘文の注釈には、錦嶽は綿向嶽ともいうとか、貫之は木工頭に任じられたのは天慶八年（９４５）三月のことで、翌九年に逝去している。ここ（日野町）は木工寮の領地であって檜材の産地であり、木工頭として銘文を残した。と記しています。

大嶽社はいま馬見岡綿向神社として日野町の氏子から崇敬され、五月二・三日の祭礼は町衆が繰り出す花飾りを付けた御神輿でにぎわう、湖

東最大の祭りとのことです。神社の境内に立っている顕彰碑には「木工頭紀貫之の梁簡銘」のことも刻印されています。

馬見丘綿向神社
本殿と　いのしし像

『滋賀県の地名』によると、祭神の天穂日命（あまほひみこと）・武三熊大人命（たけみくまうしのみこと）・天夷鳥命（あめのひなどりのみこと）の三神はいずれも出雲系の神で出雲宿祢が宮司を勤めていたが、南北朝頃から紀氏が神主になった。しかし御神輿は出雲系の子孫が供奉しない限り動かせなかったとも書いています。出雲系の人たちが多いこの地域でどうして紀氏が神主になったのか気になります。

日野町には「木地師」を営む家がかなり散見されます。「木地師」とは、ろくろを使ってお椀を加工する職種であり、ここは「こけしの故郷」ともいわれ「木地師の祖神」と称えられる惟喬親王神社が隣町の永源寺町君ヶ畑に祀られています。

皇位継承に敗れた惟喬親王

惟喬親王は第５５代文徳天皇と紀静子との間に生まれた長男でしたが、文徳崩御にともなう後継者争いで、藤原良房の娘明子が生んだ生後９か月の幼児にその席を奪われました。これこそ藤原氏と紀氏の最大の争いとして後世にいくつもの逸話が残されています。

惟喬親王がどうして「木地師の祖神」なのか。都落ちした惟喬親王が山奥で隠棲生活を送ったとき、皇位継承事件にかかわった紀氏の氏人もこの地に移住したのではなかろうか。

皇位継承事件（８５８年）から９０年後（天慶８年が９４５）、紀貫之がこの地に足を踏み入れ、**大嶽社**の改修に関わったことがその後の神主交代劇に関わっていないだろうか。

ここで「資料を偏重する歴史学者」を批判する作家・高橋克彦氏と井沢元彦氏らの日本の歴史は「言霊」「穢れ」「怨霊」によって築かれてきたという説に耳を傾けたい。

『古今和歌集』の序文で紀貫之は、遍照・在原業平・文屋康秀・喜撰・小野小町・大伴黒主を「六歌仙」としているが、この六人は歌数が少ないとか、秀歌とも思えないのに、なぜ歌仙としたのか。「惟喬親王の皇位争いにかかわって、いずれも失脚した人物」ではないかと指摘しています。

遍照は東宮職、つまり皇太子時代の惟喬親王に仕えた人物。**文屋康秀**は惟喬親王敗北とともに左遷された人物。**喜撰**は「紀仙」とも書き、紀氏の人物で静子や有常の兄弟とみられる。**小野小町**は絶世の美人ながら謎の人物。惟喬親王は出家して素覚法師と名乗り小野の里に隠棲したことがある。小野の地は妹子以来、小野家の領地でもあった。**業平**はいうに及ばず、問題は**大伴黒主**だが、この黒主というのは個人名ではない。８４２年（承和９年）嵯峨上皇が亡くなった時「謀反」が発覚し、首謀者の伴健

岑，橘逸勢が流罪になったことや、８６６年（貞観８年）応天門の放火事件で大伴善男が放火の主犯にされて遠流の処分になったなど、大伴一族の怨霊を代表する名前だという。

紀貫之が『古今和歌集』の序文でこうした怨霊をもった人物を「歌の仙人」とした意図はどこにあったのか。『古今集』は醍醐天皇の勅命にしたがって撰修したもの。歴史的にみて罪もなく政治的な理由で排斥された人物の怨霊を鎮めるのは時の天皇のとって大事な責務でした。怨霊とされた人物の名誉回復とともに彼らを顕彰し、喜ばせることが大切であり、「六歌仙」はまさにこうした人物として祭り上げたという。ところで六歌仙に選ばれたのがたまたま貫之の身近な人物だったのか。隠れた企みはなかったのか。疑問は尽きませんがまたの機会にします。

貫之の心情は・・・

貫之に関して『大日本史料』にもう一つ重要な記事があります。

【官報】第６２３７号・明治三十七年四月十九日　叙任及び辞令

贈従二位　　故従四位下　紀朝臣貫之

とあります。貫之の「贈従二位」の記録は初見です。つづいて【祭祀録】贈位策命案があって、「従二位」贈呈の根拠として貫之の業績が述べられています。次のような内容です。

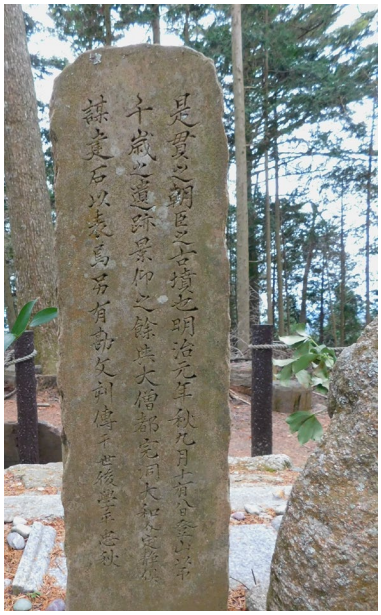
２７歳（寛平７年）百番歌合に参加して以来、天慶４年（９４１）まで『古今集』撰修のほかに宮廷と藤原氏への屏風歌を詠んだことを取り上げています。屏風歌とは寝殿造りには間仕切りに立てられた屏風があり、ここに絵画と和歌が描かれたものです。最初の歌は仁明天皇と紀種子との間に生まれた本康親王７０歳の祝いの時であり、「古今集」には３９点あって、うち２１点が皇室関係者への提供。１８点が藤原氏の４０歳、５０歳の祝賀や子女の髪あげ（成人式）の祝賀の祝い歌ですが、注目すべきは皇室関係者といえどもその多くは藤原家の係累の子女であって、いわば屏風歌は藤原氏のために詠い描き上げた代物といえます。

ある著書に「貫之は藤原氏の太鼓もちだった」とか、「藤原氏の顔色をうかがいながら人生を送った」と論評しています。そういわれるのは貫之が６０歳のとき結婚した女性は孫世代に当たる１７歳の藤原慈望の娘であり、藤原氏とは縁戚関係にあったのです。摂関政治を握った藤原氏のもとで貫之はどんな思いで屏風歌を作ったのか。「貫之」の名の通り「歌に命をかけ貫き通した」という論評もあります。

その貫之が明治になって「従二位」の位階が贈られ、墓が建てられたことによって、貫之は草葉の蔭でどう思っているだろうか。

明治の俳人・正岡子規が『歌詠みに与える書』で「貫之は下手な歌よみにて古今集はつまらぬ」と書いたのは明治３１年。「従二位」の贈位はその数年後のこと。子規の思惑とはちがった評価がなされたということになります。

あらためて裳立山の紀貫之の墓に注目しました。裏面に「是貫之朝臣之古墳也明治元年九月八日登山千歲之遺跡景仰之餘與大僧都完洞大和介定静相図建碑刻伝千世行学平忠秋」とあり、明治元年、貫之が愛した場所に完洞や定静らが墳墓を再建したということです。



裳立山・紀貫之墓の裏面

馬見綿向神社東南隅から望むわら向き山

編集後記

秋彼岸が過ぎて、皆さんいかがお過ごしでしょうか。

この号の発行が一週間ほど遅れてしまいました。橋本健一さん、竹中良行さん，大塚恒平さんからは連載形式でご投稿いただき、編集の苦労が少なくなっています。老体にとっては有難いことです。

さて、発信地からの情報としてやっぱり欠かせないのはこれです。

一発の銃弾が時の政局を大きく変える事件が奈良で起ったことです。家庭を破壊されたことに対する仕返し。その相手が「祖先の祟りを鎮めるため」を唱える霊感商法の教団だったのに、銃撃を受けたのは元一国の首相だった。その結果、両者の因果関係が明るみに出ました。

「祖先の祟りを鎮めるため」と高額の壺や印鑑を買わせる。その代金や信者の献金は教団の本家・韓国へ送金。宗教法人だから納税免除。

教団の広告塔が元首相を取り囲む政党の国会議員や地方議員の選挙応援にかかわっていた。現首相はこの関係はヤバイと思ったのか、国葬によって教団との関係（広告塔だったこと）を隠そうとした。国民の非難を受けても憲法違反の国葬は強行した。ところが、現実はその後もポロポロと教団と政治家の癒着関係がこぼれ落ちている。

政治家と教団との癒着関係は半世紀以上続いてきた。現首相は、表面をなでるだけの「説明」ではなく、事実関係を掘り起して関係を断つことが求められているのに自ら清算できない。支持率が下がるのは当然だ。

「霊感商法」「インチキ商法」の教団が宗教法人を隠れ蓑にしていることにこそ根源にあるのではないか。宗教の名に値しないのは誰の目にも明らかだ。国民はここに注目していると思う。結末はどうなるか。国民注視のなかでの攻防は続くことだろうし眼が離せない。

（野尻幸男）